



四 美味しい結末

「こらこら、慌てないで。ゆっくりと食べなさい」

僕がスパゲティを落とすと同時に、パパからすぐにお小言が入った。

「そうよ。ママも、さっき言ったでしょう」

このときばかりと、ママもパパに追従する。普段は、二人とも会話らしい会話はしないくせに、僕のことになると意見が一致する。

「それにしても、この画用紙の絵はさっきよりも増えたんじゃない」

と、僕は率直な疑問を口にする。

「まさか、絵が勝手に増殖するわけではないだろう。それに、ほとんど白いままじゃないか」

「そうやって、あなたはいつも誤魔化すんだから」

そうか、パパやママにはこの絵が見えないんだ。たぶん、大人には見えないんだろう。それじゃあ、まるで、ピーターパンの世界みたいだな。僕はトマトがべったりとついたスパゲティを拾い上げた。

「一体、どうしたんだ。街の象徴の礼拝堂がオレンジ色に染まったぞ」

「オレンジ人たちの仕業か」

「いや、空からオレンジの雨が降ってきたのを見たぞ。これは、二次元じゃなく、三次元世界からの攻撃だ」

「となると、神様か」

「まさか。私たちを生んだ神様が私たちを裏切るなんて」

「とにかく、このオレンジ色をなんとかしないと、グリーンタウンが崩壊してしまう」

グリーンタウンの住人たちは、急いで、ケチャップの上から、緑色を塗ろうとしたが、滑ってうまくいかない。かえって、オレンジ色が広がるばかりだ。とうとう、グリーンタウン全体が、ケチャップ色に染まってしまった。これを見ていたオレンジタウンの住人たちは、「ついに、宿敵グリーンタウンが崩壊したぞ」と喜びの声を上げたものの、だからといって、グリーンタウンがオレンジタウンになったわけではない。別のケチャップ王国に変わっただけだ。

僕は画用紙の上に落としたスパゲティを拾った。そして、ナプキンで画用紙に付いたケチャップを拭こうとした。だけど、ナプキンで拭けば拭くほど、ケチャップが画用紙に広がってしまった。

「画用紙を拭くのはもういいから、野菜スープを飲んでしまいなさい」

ママからお小言だ。特に、野菜が嫌いなわけではないけれど、いつも野菜が最後に残ってしまう。やっぱり、心のどこかで拒否しているのだろう。僕の食事の仕方は好きな物を先に食べ、嫌いな物が最後まで残ることを再確信した。

僕は左側にあるカップに左手で持ったスプーンでスープを一口掬う。スープはえんどう豆のグリーン色だ。だけど、嫌々食べようとしたので、スープがスプーンからこぼれて画用紙の左半分に飛び散った。

「ちゃんと行儀よく食べないといけないでしょう」

またまた、ママからのお小言を食らう。嫌いなことは野菜スープを飲むことだけで十分なのに、お小言までもらうなんてうんざりだ。嫌気でお腹でなく頭の中が満腹になる。僕はナプキンで、画用紙に落ちたえんどう豆スープを拭おうとした。

オレンジタウンの片田舎で、おじいさんとおばあさんが散歩をしていた。

「おっ、どうしたんだ。雨が降ってきたぞ」

「雨なんか降っていませんよ。おじいさん」

「そんなことないぞ。ほら、わしの服を試してみろよ。おばあさん」

「あらまあ、大変。おじいさんの体にグリーン色の斑点ができていますよ」

「おっ、これはどうしたことだ。まあよ、おまえの体もわしと同じようにグリーン色の水玉模様ができていますぞ」

「あら、本当。でも、斑点を水玉模様と言うなんてきれいな表現ね」

「世間では、オレンジタウンとグリーンタウンが喧嘩していると噂に聞いたけれど、わしらもその被害に遭ったのかな」

「そうかも知れませんね。でも、オレンジ色の体にグリーン色の水玉模様もきれいですよ」

「そうだなあ。でも、オレンジ色の体にグリーン色の水玉模様がついたわしらは、オレンジタウンの人間なのか、それともグリーンタウンの人間なのか。どっちなんじゃ？」

「どちらでもいいんじゃないですか。おじいさん」

「そりゃ、そうだな。おばあさん。オレンジ色の体にも飽きてきたことだし、両方の色が楽しめるなんて、新しい人生だ」

「そうですよ、おじいさん。今、争っている人たちに、この豊かな気持ちを伝えてあげませんか。それが、私たちの最後の仕事ですよ」

「お前もいいこと言うなあ。それじゃあ、早速、街に出掛けよう」

「そうしましょう。おじいさん」

ちょうど、その時、おじいさんとおばあさんの住む家に、空から小雨じゃなくグリーン色のどしゃぶりの雨が降ってきた。

「きゃー、おじいさん。体中がグリーン色になっちゃいましたよ」

「わしもじゃ。おばあさん」

「オレンジタウンとグリーンタウンの仲を取り持つことができなくなりましたねえ」

「なあに大丈夫じゃ。体がグリーン色でも、心はオレンジ色じゃ。オレンジ人にもグリーン人にもわたしの気持ちは伝わるはずじゃ」

「うまくいくといいですね」

「ああ。うまくいくとも。おばあさん。わしの手をしっかりと握っておけよ」

「はい、はい。おじいさん」

「「はい」は一回でいい」

「はい、はい」

水玉模様の体から、全身グリーン色に染められたおじいさんとおばあさんは、大雨から濁流となったグリーン色の洪水に飲み込まれて、街へと流されていった。

えんどう豆のスープが大波となって押し寄せてきたオレンジタウンの街ではオレンジ人が大騒ぎ。

「おっ。これは何だ。グリーン色の津波だ」

「どこかのダムが壊れたのか」

「オレンジタウンにはダムなんかないぞ」

「あたしたちの市庁舎がグリーン色に染まったわ」

「それは大変だ。グリーンタウンの奴らによる攻撃なのか」

「いや。グリーンタウンは滅びたはずだ」

「生き残ったグリーン人によるテロ攻撃かも知れないぞ」

「俺たちは恨まれるようなことは何もしていないはずだ。元々は、グリーン人たちが悪いんだ」

「そんなこと議論している暇はないぞ。とにかく市庁舎を守れ」

オレンジタウンの人々は、オレンジ色のクレヨンを持って、グリーン色に染まったオレンジタウンの象徴である市庁舎を塗り替えようとした。だけど、クレヨンは滑って、オレンジ色に塗り替えるどころか、かえって、グリーン色を広げることになってしまった。

「しまった。消防署もグリーン色になったぞ」

「警察署もだ」

「電車やバスのターミナルもよ」

「このままでは、オレンジタウンがすべてグリーンタウンに変わってしまうぞ」

「だが、どうすることもできない」

「くそ、いまましい。グリーン人め」

オレンジタウンの人々も建物も、全てエンドウ豆のスープのグリーン色に染め換えられた。グリーン色のスープの海にもがくオレンジタウンの人々。ただし、グリーンタウンが復活したわけではない。グリーン色のスープ王国になっただけだ。でも、そのおかげで、オレンジタウンとグリーンタウンの人々は闘うことができなくなった。おかげで両タウンの戦いは終わることになった。誰が喜ぶのか、とにかく、神様、バンザイ！

「残念ながら、勝負は引き分けのようですね」

「そうですね。人間たちは、以外に、賢かったようですね。こういう終わり方になるとは思いませんでした」

「それとも、もう一度、時間を戻して、やり直しますか？ 待って、は一回までは有効ですよ」

「いえいえ、このままでいいですよ。こういう結果を私たちも心の奥底で望んでいたのかも知れません」

「クレヨンはどうします？ 回収しますか？」

「もう、力はないはずですよ。そのままにしておきましょう。夢を描くのだけでしたら、問題ありません」

「それと、賭けの約束の服の交換はどうしましょうか？」

「こうしましょう」

グリーン神は、右手で自分の服の左肩を掴み引っ張ると、左半身の服が破れた。

「それなら、私も」

オレンジ神も、左手で自分の服の右肩を掴み引っ張ると、左半身の服が破れた。

神様は、お互いに手にした服を交換して、破れた服を縫い合わせた。二人のオレンジ・グリーンの神様が新たに生まれた。

「さあ、乾杯といきますか」

「誰のために？」

「神と人間と美味しいスパゲティに」

「おい、ハヤテ。大丈夫か。起きろ、起きろ」

パパが僕の耳もとで叫んでいる。

「この子ったら、いやだわ。スパゲティを食べながら、眠るなんて」

ママが僕の体を揺すっている。僕は顔を上げる。僕は右手にはスパゲティが巻き付いたフォークと左手にはオレンジ色と緑色のクレヨンを握りしめていた。

イタリア料理店では、お客様が一人残らず帰った後、従業員によって飛び散った料理やクレヨ

ンで汚れた画用紙クロスがはがされた。そして、再び、白い画用紙がテーブルの上に敷かれ、その上に、十二色のクレヨンが置かれた。その後、全ての色がしまわれたかのように、店は電気が消え、闇色に包まれた。